続　軀で読む文献

山田　俊（中国思想史）

夏の朝まだ明け切らない公園の、薄暗い灯りの下で陳式太極拳を錬っていた時のことである。一瞬、足元に野球のボールが転がっているのが目に入った。足の位置を微妙に調整してそれを避け、その後も何度か歩みを調整することで、踏むことなく終えることが出来た。

そして、危ないからどけておこうと手を伸ばした時、

「……」、

それはボール状をした一枚の枯葉であったことに気付いた。

少し、あれこれと考えた。

枯葉ではあったが、ともかくも「異物」を巧みに避けながら太極拳を錬ることが出来たことをよしとすべきなのか。いや、枯葉をボールと誤認した私に問題があったとすべきではないのか。意識を自分自身に過度に集約しているために、外界の事物を正しく認識できていないというのは問題があるのではないか。少なくとも、太極拳を錬っている時の私の意識全体の流れの中で、「異物」に過敏に注意を払っている瞬間だけは、その流れがいびつなものとなっているはずだ。もっと言えば、日常生活の場で、即ち、子供と公園を散歩していた時に同じ枯葉を目にしたら、やはりボールと誤認していたであろうか。

二〇〇五年度後期「中国文化論演習」の授業で、清代の陳鑫（一八四九～一九二九年）なる人物の『陳氏太極拳図説』（一九一九年編纂）を学生と一緒に読んだ[1]。陳鑫は陳氏一族の第十六代目に当たり、その兄の陳垚は十九歳で武術学校に入り、毎年一万回も太極拳を練習し、二十年一日のごとく練習した結果、その拳は非常に重厚であったとされる。もともと武芸の才に秀でていた兄に対して、弟の陳鑫はむしろ文才に恵まれ、陳氏一族が代々伝えて来た太極拳の理論を明らかにすることを志す。彼の著述には『陳氏家乗』、『安愚軒詩文集』、『陳氏太極拳図』、『太極拳引蒙入路』、『三三拳譜』があったとされる[2]。このように、陳式太極拳の精髄を初めて理論化し編纂したものとして、陳鑫の『陳氏太極拳図説』は現在でも高く評価されているのである。

陳氏一族とは、明代末期頃に河南省温県の後に陳家溝と呼ばれることになる土地に移り住んだ陳卜を第一代とし、実質上第九代の陳王廷あたりから代々陳式太極拳を伝えて来た一族とされている。現在各種ある太極拳の源流がこの陳式太極拳であり、陳式太極拳は陳氏一族によって代々創

意工夫が加えられて現在に至っているのだという見解が存在するのだ。陳鑫は、言わばこうした陳氏の伝統のど真ん中にいるのであり、従って、彼によって書かれた『陳氏太極拳図説』には、陳氏太極拳に関する一つの伝統がそこに集約されていると言うことが出来る。

さて、講義の予習のためにこの『陳氏太極拳図説』を改めて通読して気付いたことに、いわゆる朱子学的思想の影響が極めて濃いということがあった。これは考えてみれば当然のことであり、そもそも、「太極拳」などと、「太極」の語を冠していること自体が、太極拳が北宋の思想家、周敦頤（一〇一七～一〇七三年）の「太極図」以来の宋学の伝統を意識していることを示しているはずなのである。陳鑫に限られず、例えば、楊澄甫の『太極拳体用全書』[3]等も、「体用」という概念自体がそれを示唆している。むしろ、そのことに思い至らなかったことこそ、迂闊であったとすべきであろう。

以下、少し、陳式太極拳の理論と朱子学の類似性について考えてみたい。

『陳氏太極拳図説』の「太極拳纏絲精図」は次のように述べている。

純粋に天と同等になることが出来れば、その拳の攻撃は自然の動きに従い、完全に自然と一体となり生き生きとして、太極の本来のあり様が、我が身体から生み出されることになるのだ。（「太極拳纏絲精図」）

「生き生きとして」は原文では「活溌溌地」。朱子学ではよく使われる概念である。例えば、

「活溌溌地」とは何か。偉大な道がこの世界の間に満ち溢れてあらゆる所で具体的な働きを起こすことだ。空を見上げれば鳶が空を飛んでいるのもその一つだ。見下ろせば魚が淵より躍り上がるのもその一つだ。人の場合は、日常の場における様々な事柄、人の道における事柄、夫婦が知っている事柄、夫婦で出来る事柄、聖人にも知らず出来ない事柄がある等、これらに具体的に見られるものがそうである。このように、この世界に満ち溢れている事柄として具体化している点から、道は具体的なものと言うことが出来るであろう。（朱熹『四書或問』巻四「中庸」）。

朱子学では、本来は形而上の存在であるため見ることの出来ない「道」が、この世界のあらゆる場所の様々な事物に具体化して現れていると考える。この具体化の仕方を「生き生きしている（「活溌溌地」）」と言うのだ。とすれば、「太極拳纏絲精図」の立場は、この「道」の具体的現れ方の一つとして太極拳の動作を考えていることになる。つまり、太極拳の動きは、あくまでも具体的な事柄のレベルで考えなければならないということになるのである。

『陳氏太極拳図説』の「太極拳経論」でも次のように

述べている。

遥か太古の混沌から始まったものは、次の段階では陰陽の二気に展開する。この世界には陰陽のみしか存在しない。天地もまた陰陽であり、万物もこの陰陽にほかならない。聖人だけがこの陰陽を維持し、理によって陰陽の気をコントロールし、陰陽の気によって理に具体性をあたえ、人間社会の道徳規範や日常生活のあらゆる場所においてそれを具体的に現わし、上空を見上げては天に恥じることなく、下を見下ろしては人に恥じることがない境地に至ることが出来るのである。これこそがこの世界における優れた人、至人なのである。（「太極拳経論」）

「道徳規範や日常生活のあらゆる場所」、原文は「人倫日用之間」。万物を生み出す根源とされる「理」は「陰陽の二気」を生み出し、それをコントロールしている。しかし、この「理」は形而上の存在、すなわち一つの理念であるため、それ自体は具体性を持っていない。従って、「陰陽の二気」と一体となることで「理」は初めて具体性を持つことが出来るのである。こうして一体となった「理」と「陰陽の二気」は日常生活のあらゆる場所に生き生きとして現れているというのである。この「太極拳経論」は、拳術書というよりは、むしろ朱子学の哲学書を読んでいるような印象を与える内容となっている。「太極拳経論」は更に次のように述べている。

気を養うことを怠って戦いの場に臨んではいけない。気の流れに逆らって好き勝手に動いてはならない。力を長く使っていると、ある時、微かな趣が溢れ出て、不可思議な理が次々と明らかになり、万物の根源が唯一の理であることに突如として気付くことが出来る。これは何とも心地よいものである。（「太極拳経論」）

「万物の根源が唯一の理であることに突如として気付くことが出来る」、原文は「万殊一本、豁然貫通」。万物を根底から支える「理」を窮める方法として、朱子学では「格物」ということを言う。「格物」とは、個々の万物の本質である「理」を一つずつ窮めていくことを言う。一つ一つの事物の「理」を窮めることを積み重ねていくと、ある段階で、突如として、全ての事物の「理」について類推することが可能となる。その瞬間を「豁然貫通」すると言うのである。その結果、万物の個々の「理」が実は唯一の「理」に他ならないことを体認することが出来るというのだ。陳鑫は、太極拳の一つ一つの動作に具体化している「理」を窮めていく内に、突如として、根源の唯一の「理」を悟る瞬間があると言っているのである。即ち、陳鑫は太極拳の具体的動作の一つ一つを「格物」として考えていることが分かる。

こうした陳鑫の理論からすれば、太極拳の動作はあくまでも具体的事柄から離れて錬ってはいけないことになる。

今見た表現では、「日常生活のあらゆる場所」から切り離して錬られてはならないことになるのだ。

さて、『文彩』の創刊号に載せた拙文「軀（しんたい）で読む文献（テキスト）」では[4]、主として仏教の禅宗文献を材料に「心身一如」の喪失の問題について考えてみた。その時は、全く意識されない「心身一如」の境地こそが理想的であり、そこに外界の影響が加わることで、その「一如」が急速に喪失していくことを考えてみた。つまり、外界物を外界物として意識しない主体のあり方こそが求められるべきだと考えたわけだ。

だが、陳鑫が大きく依拠する朱子学では、こうした考え方は仏教や道教の誤った立場として批判されている。例えば、

思うに、道教・仏教の欠点は具体的動きを嫌い、動きの無い静かさを求めていることで、その思想には本体があるものの作用がないことだ。…だいたい、道教・仏教は静かなることを説いてこの世界の動きをなくそうとしているのだ。これはまるで眠り続けて覚めず、有用を無用に捨てているようなものだ。聖人賢者はこのようなことはしない。（朱熹『朱子文集』巻五十四「答徐彦章」）

道教と仏教が具体的な作用を嫌い静かさを求めるのは、「道」が個々の事物に具体的に現れていることから目を背け、形而上としての「道」そのものを求めているのだと、朱熹は批判しているのである。つまり、具体的世界との関りを断ち切り、内なる形而上の「道」のみに執着している点で、道教・仏教は誤っているとするのである。

こうした朱子学の立場が陳鑫の太極拳理論に受け継がれているということになれば、太極拳を錬る時に、外界を意識することで内なる自己が「ぐらつく」ことを避けようとするのは、道教・仏教流の考え方であると批判されることになるのである。更に言えば、朱子学に基づく陳鑫の理論では、太極拳を錬るその時その時において、常にそれは日常生活のあらゆる場所に存在していなければならないことになる。つまり、外界の出来事の一つ一つに常に向かいながら、その出来事との交わりの中においてこそ内なる主体を確固たるものとして具体的に現していかなければならないことになるのである。これこそが、朱子学的発想に立脚した陳鑫の理論なのである。つまり、前稿「軀（しんたい）で読む文献（テキスト）」で考えた様なレベルでの「心身一如」は、陳鑫が主張する陳式太極拳の伝統理論においては、極めて低次元のものでしかないことになってしまうのだ。

二〇〇六年五月、中国の山東大学の学生を相手に講義をする機会があった。講義内容は私の専門とする道教研究についてではあったが、講義後に中国人学生諸君と自由に質疑応答する時間を持つことが出来た。その大半は道教に関

するものであったが、中に一人、太極拳と道教の関係について質問した学生がいた。前年度に熊本県立大学で中国文化と太極拳の講義をしたばかりであったので、この応答はかなり充実したものとなった。彼が太極拳と道教の関係を質問したのは実は無理からぬことで、太極拳の創始者は明代の張三丰という道士（＝道教修行者）である、という別の見解があるからである[5]。先の陳氏一族創始説と並べて、太極拳の創始に関する二大説ということになろうか[6]。

彼の質問に答えるに先立って、私は学生諸君に「太極拳の創始者は誰だと思いますか？」と尋ねた。彼等からは、声を揃えて「張三丰！」との答えが返ってきた。私が続けて「本当にそう思いますか？皆さんは『太極大師張三丰』という映画[7]を見たのではないのですか？」と尋ねると、これもまた多くの学生が「アハハッ」と笑って答えた。つまり、太極拳の創始者は誰かと尋ねられれば「張三丰」と答えるが、それは武侠映画や武侠小説の世界の事柄かもしれないという認識も一方で彼等は持っているのである。

張三丰は明代に実在した道士とされている。中国の道教研究者・李遠国氏は、張三丰には儒教・仏教・道教の三教を同等のものとして扱う思想が見られると指摘した上で[8]、

「道」というものは、「窮理尽性以至於命」そのものに他ならない（『張三丰全集』「大道論」）。

と、張三丰の言葉を引用する。もともと『易経』「説卦」に見られる「理を窮め性を尽くし、以って命に至る」の表現は、確かに朱子学が好んだものであり、その語を用いていることで張三丰には「理学」（＝朱子学）の影響があるとするのである。それはそうであろう。そもそも、朱子学が隆盛した元代を継ぐ明代に張三丰は活動している。明代の人物の文章に朱子学の影響が見られるのは当然のことなのである。問題は別の所にあるであろう。先ず、李遠国氏が資料として用いている「大道論」が果たして張三丰の作であるのかが疑わしい。後世の仮託であるとの指摘もある[9]。百歩譲って「大道論」が張三丰の作だとしても、朱子学的表現が用いられていることと、彼の思想が朱子学と融合していることとは別問題なのである。例えば、これも張三丰の作かどうか疑問視されているものではあるが、李遠国氏が張三丰の文として引用している「玄機直講」という文には次のようにある。

最初に、心の感情を消し去り、雑念を取り去る。これが先ずなすべき「築基煉己」の修養なのである。（「玄機直講」）

毎日、先ず（心を）暫く静かにさせる。心身が全て鎮まり、呼吸が整ってから、初めて両方の目を僅かに閉ざし、（身体の内部の）心臓の下、腎臓の上、一寸三分の所に意識を集中し、それを見失うことなく、かと

いって過度に執着することなく、忘れ去ってもならないが、過度に働きかけてもならないようにする。様々な雑念が全て消え去った時、光り輝くもののみがそこに残るのである。これを「正念」と言うのである。

（「玄機直講」）

ここで述べられている事柄は、雑念を生み出す原因となる外界との関りを断ち切り、自己の内側のみに意識を集中することで修養をしようとする立場である。これは「内丹」「存思」等と呼ばれる道教の伝統的修養方法に相当する。即ち、あくまでも具体的事物との関りの場において修養しようとする朱子学とは異なる立場なのである。

朱子学以降に道教を論じる者の多くは、朱子学を意識せざるを得ないのが実情である。しかし、朱子学を意識することと、朱子学と有機的に融合しているかどうかとは別問題なのである。朱子学的発想と道教的発想が実はなかなか相容れにくいものであることを以前少し考えたことがあるが[10]、やはり、張三丰の道教的修養論と朱子学的思想とはなかなか溶け合いにくかったのではないだろうか。

とするならば、陳鑫の『陳氏太極拳図説』で描写されているものが陳式太極拳の伝統的理論であるとの前提に立つならば、張三丰との関りからは二つの結論しか導き出されない。一つは、現在伝承されている陳式太極拳の理論は張三丰とは無関係のものである。つまり、張三丰は太極拳の創始者ではない。もう一つは、張三丰が太極拳を創始したかもしれないが、そこには本来朱子学的要素はなく、後世、そこに朱子学的要素が加わり、張三丰の時のものとはその内容が全く変ってしまった。この二つである。何れの場合にしろ、現在伝わる陳式太極拳の理論と張三丰とが関りがあるとは言い難いことになるのである。

だが、陳鑫の理論が陳式太極拳の理論を代表するものであるとの前提を暫く横に措くならば、事態は異なってくる。「私は砲捶（陳氏一族に代々伝わる少林系の拳術：筆者）も太極拳も練習していません。易経を熟読しているだけです。」と、陳鑫は呉図南なる人物に語ったとされているが[11]、「練習していません」の語をどの程度真に受けてよいものなのか。また、「兄の武術が大成したことにより、発奮して書物を著述し、陳氏が代々伝えて来た太極拳の理論を明らかにすることを志した。」と[12]、兄の武芸の才に気付き、自身は武芸自体を窮めるよりも、それを理論化することを選択したという陳鑫の経緯を踏まえるならば、或いは、陳鑫の文章は過剰に理論化に走りすぎていた、些か机上の空論となっていたということは考えられないのだろうか。本当に陳式太極拳の歴代の拳士達が皆な陳鑫が言うような朱子学的世界の中で拳を錬っていたのであろうか。疑問を感じはするものの、こればかりは私には分からない。

太極拳創始者と張三丰との問題は、実は色々な思惑も絡

んでおり、慎重に発言しなければならない問題である[13]。ここでは、とても微妙な問題であるとだけ述べておくに留めたい。

『文彩』創刊号に文章を書いた頃から丁度二年が経過した。この間、二日に一度、一度に二回ずつ太極拳を錬ってきたので、二年間で七百三十回前後練習したことになる。改めて数えてみると非常に少ない[14]。食事の回数ですらこの間に二千回を超えている。呼吸の数を言えば比較にすらならない。つまり、私にとって太極拳を錬ることは、食事を採る程にも日常化していないのである。そのことを思えば、「日常生活のあらゆる場所」で太極拳を錬ることなど私には到底不可能なのであり、朱子学の影響だの、道教的だの、と言う事自体、私には無理なのであろう。少なくとも、太極拳の一つ一つの動作で「格物」を達成しているのであれば、「枯葉」を「ボール」と誤認することはありえなかったはずなのだ。

ともあれ、この二年の間に、また一つ世界が広がったことは間違いない。

（注）

1　テキストは『陳氏太極拳図説』（上海書店出版社。一九八六年）を用いた。本論での引用文も同書による。

2　沈家楨・顧留馨『陳式太極拳』所収「陳鑫伝略」（人民体育出版社。一九九四年）。

3　楊澄甫『太極拳体用全書』（上海書店、一九九五年）。

4　「軀（しんたい）で読む文献（テキスト）」（熊本県立大学文学部『文彩』創刊号、二〇〇五年）。

5　この立場の典型としては、例えば、黄耐之著・永冨博道訳『古伝太極拳―張三峯と彼の太極拳』（株式会社ベースボール・マガジン社。一九八六年）等がある。

6　もっとも、陳氏一族創始説についても近年は疑問視されている。笠尾恭二『太極拳血戦譜』（福星堂、一九九九年）、清水豊『太極拳秘術』（柏書房、二〇〇五年）、「真説・太極拳論（歴史篇）」（『月刊　秘伝』二〇〇六年九月号、ＢＡＢジャパン）等は若干の立場の違いはあるものの、太極拳は外部者である西安出身の蔣発が陳家溝の陳長興（第十四代）に伝授したものとしている。

7　太極拳創始者としての張三丰の生涯を描いた映画。ジェット・リー主演、一九九四年製作。邦題は『マスター・オブ・リアルカンフー／大地無限』。

8　李遠国『道教気功養生学』（四川省社会科学出版社、一九八八年）五百十二頁。

9　黄兆漢『明代道士張三丰考』（台湾学生書局。中華民国七十七年）。

10　拙稿「董思靖『道徳真経集解』の思想」（『中国の思想世界』所収。イズミヤ出版、二〇〇六年）。

11　前掲清水氏著五十五頁所引。

12　前掲「陳鑫伝略」。

13　中国では創始者を巡って訴訟問題にまで発展している。例えば、趙堡太極拳と和式太極拳の創始者を巡る騒動については、鄭徳「護法衛道、弘揚国粋」（『武当』二〇〇五年第四期）を参照。

14　ちなみに、陳垚の一年で一万回という回数は、一日当たり二十八回ということになる。